

## 学習基本調査の特徴

学習基本調査は、「①学習に関する意識・実態調査（アンケート調査）」と「②学力調査」、「③都市間国際比較調査」の3種類からなっている。①は第1回（1990年）、第2回（1996年）、第3回（2001年）、第4回（2006年）と、ほぼ同一の小学校、中学校、高校を中心にご協力いただき実施した。②は①の対象となった小学校、中学校を対象に第3回、第4回で実施し、③はアジアと欧米の大都市の児童に対して、はじめて実施した。

学習基本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

### 1. 時代による変化を把握することができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、時系列的に調査することを目的として企画した。そのため調査項目は、時代や教育環境の変化に応じて多少の追加・削除はあるものの、ほぼ同一の項目を使用している。本報告書では1990年から2006年までの16年間で子どもたちの意識・実態がどのように変化したかという視点で分析を行っている。

調査対象は、大都市、地方都市、郡部の3地域の公立校から選定し、地域による違いがみられるようにしている。また対象学年は、小学校5年生、中学校2年生、高校2年生を選んでいる。高校に関しては、普通科を対象とし、進学状況による違いがみられる学校群を選定している。調査対象校は、4回の調査ともほぼ同一で、時系列的な変化を把握することができる。

### 2. 小学生、中学生、高校生の学習実態の比較ができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、小学生、中学生、高校生という学校段階の違いがみられるよう、共通の質問項目を設定している。学校段階による違いを一部抜粋したもの（『第4回 学習基本調査 国内調査・速報版』）をBenesse教育研究開発センターのウェブサイト（<http://benesse.jp/berd/>）に掲載している。

報告書は、小学生版、中学生版、高校生版の3冊に分かれている。

### 3. 学力の実態を把握することができる

「②学力調査」は、実際の学力の状況を把握するために、小学生、中学生に対して算数・数学と国語のテストを行っている。学習指導要領に沿った知識・理解を測定する問題と、知識・技能を日常生活や問題解決の場面で活用する力を測定する問題を作成し、「①学習に関する意識・実態調査」の対象となった児童・生徒の一部に調査を行った。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 4. 意識・実態と学力の関係を明らかにできる

「①学習に関する意識・実態調査」と「②学力調査」の両方のデータから、意識・実態と学力がどのような関係にあるかを明らかにする。

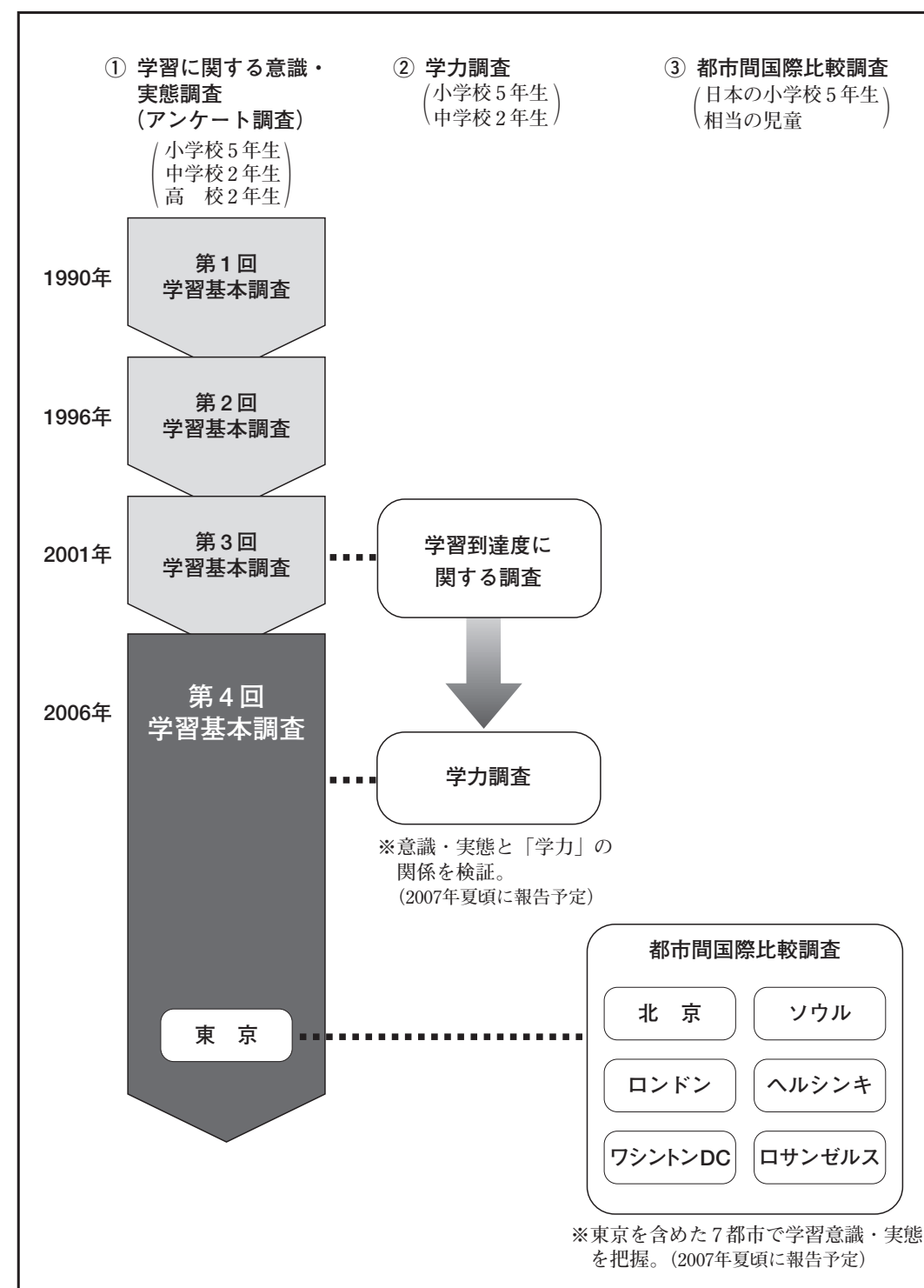
※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 5. 国際比較により児童の学習意識・実態の違いを把握することができる

「③都市間国際比較調査」は、アジアと欧米の5か国6都市と日本（東京）の児童の学習意識・実態の違いを把握することを目的として調査を行っている。調査対象は日本の小学校5年生相当の児童とし、調査項目は各国の教育課程や教育事情を考慮して多少の追加・削除をしているが、ほぼ同一の項目を用い、各都市間での違いがみられるように配慮している。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

## 学習基本調査の枠組み



## 学習に関する意識・実態調査の概要

### ●調査テーマ

小学生の学習に関する意識・実態調査

### ●調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査

### ●調査時期

2006年6～7月

### ●調査対象

全国3地域〔大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）〕の小学5年生2,726名

※第1回（1990年）2,578名、第2回（1996年）2,665名、第3回（2001年）2,402名

### ●調査項目

好きな教科／授業の理解度／家庭学習の時間・内容・様子／日常生活の中での「学習」／授業の受け方／好きな学校の勉強方法／学習塾の利用／習い事・おけいこ事／学習して感じること／成績の自己評価／学習上の悩み／成績観・学力観／社会観・価値観／進路・進学意識／将来つきたい職業／心や身体の疲れ／メディアの利用／家庭環境

※調査テーマ、方法、対象（調査校）、項目は、第1回～第3回とほぼ同じ。ただし、調査項目は時代の変化に合わせて、多少追加・削除している。

※本調査は、時系列での比較や地域による違いをみるために有意抽出した小学校を対象とし各回ほぼ同一の対象に調査を依頼している。そのため、数値は全国的な小学生の代表値を示すものではない。

※本報告書で使用している百分比（％）は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。また、数値表記のしかたによって、第1回の数値がこれまでの報告書に掲載した数値から0.1ポイント前後している場合がある。

※本文中での成績の「上位層」「中位層」「下位層」とは、8A.「あなたの今の成せきは、クラスの中でどのくらいですか」という質問に対し、自己評価によって「1（上のほう）」～「3」と回答した児童を「上位層」、「4（真ん中）」を「中位層」、「5」～「7（下のほう）」を「下位層」とした。

### 有効回答数

(名)

	男子	女子	無回答・不明	合計
大都市（東京23区内）	567	532	6	1,105
地方都市（四国の県庁所在地）	342	333	9	684
郡部（東北地方）	488	445	4	937
合計	1,397	1,310	19	2,726

## 第2章の要約

### ■第1節 小学生の学習行動

#### 1. 学校での学習の様子

##### ① 好きな教科

「算数」が「好き」という回答比率が大幅に増加している。「総合的な学習の時間」も第3回より増加している。小学生が「好き」な教科のベスト・スリーは依然として、すべて実技教科で、「体育」「家庭」「図画工作」の順である。また、性別で見ると、男子が「算数」「理科」「体育」が好きなものに対して、女子は「国語」「音楽」「家庭」が好きである（図2-1-1、表2-1-1）。

##### ② 授業の理解度

「国語」「社会」「算数」「理科」の4教科に関する授業理解度の自己評価については、全般的に「わかっている」の回答比率が増加し、学校の授業がわかるようになってきているといえる。第1回から第4回の16年間の変化をみると、「算数」の増加幅がもっとも大きい（図2-1-2、表2-1-2）。

##### ③ 授業の受け方

「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」などの回答比率が増加している。一方、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」「近くの人とおしゃべりする」などが減少している。授業中、逸脱行為が少なくなり、全体的に授業をまじめに受けている様子である（表2-1-3、4、5）。

##### ④ 好きな学校の勉強方法

「好き」の回答比率をみると、すべての項目で5割を超えている。もっとも回答比率が高いのは「パソコンを使ってする勉強」で、もっとも低いのは「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」である。成績の自己評価別で見ると、すべての項目で、上位層のほうが下位層より「好き」の回答比率が高い（図2-1-3、4）。

## 2. 家での学習の様子

### ① 学校外での学習時間

小学生の学習時間には個人差があるが、平均すると81.5分である。「ほとんどしない」と「およそ30分」を合計した比率は第1回28.5%→第2回32.3%→第3回40.3%であったが、第4回は33.1%と減少しており、小学生が学習に回帰している様子がみられた。大都市の中学受験予定者の増加、中学受験予定者がさらに勉強に向かったことが主要要因と考えられる(図2-1-5、6、7、8、9、表2-1-6、7)。

### ② 家での学習の様子

「あてはまる」と「まああてはまる」の合計比率の大きい項目は、「出された宿題をきちんとやっていく」(94.0%)、「勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く」(88.9%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(81.3%)と続く。時系列で見ると、第1回から第4回の16年間で、小学生の家庭での学習態度は計画的でまじめな様子になっていることがうかがえる(図2-1-10、表2-1-8)。

### ③ 日常生活の中での「学習」

日常生活の中での「学習」で、もっとも多かったのは「文学・小説・物語・童話などの本を読む」の74.6%、つづいて「読みたい本を本屋さんで探して買う」が71.1%、「家でペットや動物・植物の世話をする」が59.4%であった(図2-1-11、表2-1-9)。

### ④ 家庭環境

「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(第1回65.9%→第4回54.9%)をはじめ、親とのかかわりが全体的に減少している。また性別にみると、勉強に対するプレッシャーや学歴期待は男子のほうが強く感じている(表2-1-10、11)。

## 3. 学校外の学習機会

### ① 学習塾の利用

通塾している小学生は36.5%と4割弱に達し、第3回からの5年間で「進学塾」の割合が急増した。大都市では「補習塾」の14.1%に対して、「進学塾」が30.5%と2倍になっている。「進学塾」での学習時間が1日に3時間を超す小学生が約7割もいる(図2-1-12、表2-1-12、13、14、15)。

### ② 習い事・おけいこ事

習い事・おけいこ事のベスト・スリーは、「スポーツ」51.3%、「音楽」22.7%、「習字」16.2%であった。時系列での変化では、「そろばん」「習字」といった日本固有の伝統的な習い事の減少傾向に歯止めがかからない。また「スポーツ」は、第2回の41.5%と比べて10ポイント近くの大きな増加となっている(図2-1-13、表2-1-16)。

## 4. メディアの利用

「家でパソコンを使う」のは約7割、「学校でパソコンを使う」のは約9割であり、第2回と比較して2倍以上増えた。インターネットを使う機会も、第3回と比較して大きく増加している(図2-1-14)。

## ■第2節 小学生の学習観・成績観・社会観

### 1. 成績観

#### ① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後にほぼ6割が集中。時系列的にみると、成績の自己評価は第1回から第4回にかけて、真ん中より上と回答する比率が高まっている(図2-2-1、2、3)。

#### ② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、上位層に8割程度が集中し、真ん中から下の成績でよいと答えた小学生は約1割にとどまり、「よい成績をとりたい」と思う小学生が多い。また、がんばればとれると思う成績では、同様に8割程度の小学生が上位層をとれると考えている(図2-2-4、表2-2-1、2、3)。

#### ③ 成績観・学力観

時系列で見ると「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(名門高校・大学志向)」が第3回から一貫して高く、ほぼ7割を占める。一方で「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない(学校生活エンジョイ志向)」「そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう」は、第3回に比べ、減少している(図2-2-5、表2-2-4、5)。

## 2. 学習していて感じること

小学生が学習していて感じることで、理科への感動の比率が80.6%と非常に高い。2番目に高かったのは国語への意欲で71.4%であった。時系列比較では、理数系科目が健闘している。理科への感動は8割強で高止まりし、興味は7.4ポイントの大幅増。算数についても、感動が5.2ポイント、興味が4.3ポイント増加した(図2-2-6、表2-2-6)。

## 3. 学習上の悩み

学習上の悩みはあまり深刻な状況ではない。今回調査対象となった小学生は、悩みよりも、意欲や喜びで形容されるのがふさわしいようだ。学習上の悩みに影響を与える要因をみると、上手な勉強の仕方がわかっている小学生はそうでない小学生と比べて学習上の悩みが少ない。また、宿題を提出しない小学生ほど学習上の悩みを感じている(図2-2-7、8、表2-2-7、8)。

## 4. 進路・進学意識

### ① 受験と希望する進学段階

中学受験を希望する小学生の比率は、今回の調査で23.5%を示しており、第1回(15.7%)から第3回(17.9%)までの微増傾向と大きく異なっている。受験を希望する中学校の種類については、半数以上の小学生が「私立中学校」を受験先として希望している。希望する進学段階は、「わからない」と回答する小学生の比率が、第3回よりさらに減少して18.8%となっており、小学生の進路意識の明確化がいつそう進んでいることがわかる(図2-2-9、10、表2-2-9、10、11)。

### ② 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男子でもっとも多いのは、「野球選手」15.7%で、次に多いのは「サッカー選手」10.2%である。それに4%程度で「サラリーマン」「医師」が続く。女子では、「保育士・幼稚園の先生」9.3%、「ケーキ屋さん・パティシエ」8.5%、「看護師」「芸能人」「ファッションデザイナー・デザイナー」(いずれも4%前後)となっている。小学生にとって目につきやすく、また、華やかで技能をとまなう職業が上位にあがっている(表2-2-12、13)。

## 5. 社会観・価値観

小学生にとっての勉強の効用は、第一に実生活にとっての有用性にある。たとえば、「よいお父さん、お母さんになるために」「社会で役に立つ人になるために」「心にゆとりがある幸せな生活をするために」である。第二に期待している効用は「尊敬される人になる」「生活を楽しむ」という内面の充足となっており、これらの効用に比べて、「出世」や「お金持ちになる」といった職業的な成功、地位の達成、経済的な成功の手段としてはとらえられていない。

また、小学生にとって、幸せの要因は、「いい友だちがいると幸せになれる」93.2%である。「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」61.2%、「お金がたくさんあると幸せになれる」46.1%を大きく上回っている(図2-2-11①②、12①②、表2-2-14)。

## 6. 心や身体の疲れ

身体的な疲労感が上位を占め、これに精神的疲労感が続いている。「進学塾」に通っている小学生の疲労感は、塾通いをしていない小学生の疲労感と比べて大きな違いはない。これに対して、授業がわからないことが疲労感に大きく影響を与えていることがわかる(図2-2-13、表2-2-15、16)。